

- [特集] 表から裏まで！
- # 隅々まで語る 肺高血圧症
- common disease を見逃さないために
- [Chapter 1] 本邦における肺高血圧症診療概論
- [Chapter 2] 肺高血圧症診断と検査
- [Chapter 3] 肺高血圧症患者の管理に関する tips
- [Chapter 4] 肺高血圧症治療戦略
- [鼎 談] 今後の本邦における肺高血圧症診療体制の理想形は何か？

肺高血圧症の診断と治療はこの四半世紀で大きく発展し、世界的にも診療ガイドラインが確立したことで円熟期を迎えている。これまでの本邦のガイドラインは、欧米のガイドラインに追従する記載が多かったのに対して、2025年3月に改訂された「肺病変を有する肺高血圧症診療ガイドライン」では、本邦の診療実態を反映した記載が増えるなど、独自色が強くなっている。

肺高血圧症における治療成績の向上は、主に肺動脈性肺高血圧症に対する治療薬の発展が背景にあり、治療ができるようになったことで疾患啓発が進み、多くの肺高血圧症患者が専門医へ紹介されるようになった。特発性肺動脈性肺高血圧症と診断される患者も増加しているが、高齢者で心肺に基礎疾患をもつ患者が増加し、非典型的な症例が増えている印象がある。これまで早期に強力な肺高血圧症治療薬を積極的に導入することを推奨してきた若年者の特発性肺動脈性肺高血圧症の治療戦略とは異なる可能性があり、専門医からみてもやや複雑になってきているなど感じている。これまで、希少疾患である肺動脈性肺高血圧症を発掘するために疾患啓発が行われてきたが、結果として多数のまれではない肺高血圧症が発掘され、肺高血圧症治療薬を使用すべきか、使用すべきでないかを一般内科の先生方が理解する必要性が出てきている。

本特集では肺高血圧症の現在の標準治療に焦点を当てて、専門医から一般内科医向けにメッセージを発していただくとともに、専門性の高い希少疾患としての肺高血圧症の治療戦略と、common diseaseとしての肺高血圧症とをいかに区別していくか、肺高血圧症専門施設と地域医療機関との役割分担などの話題にも踏み込んで議論できるような企画とした。

牧 尚孝

(自治医科大学附属さいたま医療センター 循環器内科)